

じょうこうじ 掟光寺だより

令和5年
8月号

行事案内

●8月12日(土)
「盂蘭盆会・施餓鬼会」

13時30分から

●8月13日

「お盆寺参り」午前7時より

●8月13日午後

8月14日

8月15日

「お盆棚経」



お盆のはじまり(落語)

●落語調でのお盆のお話です。

「ご隠居さん、お盆が近づいてきましてねえ」

「うん、しかしおまえさんでも、お盆に何か思うことあるのかい」

「そりゃ、あつしだって、お盆が近くなると、死んだオヤジの顔を思い浮かべますよ。小さいころは毎日のように怒られてましたが・・・」

「殊勝なことだね。『魂棚の奥なつかし

や親の顔(向井去来)』というところだな」

「失礼な、猫のタマがねてる棚の奥なにかにオヤジはいませんよ」

「なに言ってるんだ。魂棚ってのはな、精霊棚といって、お盆に、先祖の霊を迎えるために用意する棚のことだ。まあ仏壇でもいいが・・・」

「それならそうと初めから言ってくれりゃあいいのに」

「うるさい男だね。ところでおまえさん、お盆のいわれを知ってるかい」

「自慢じゃないが知るわけがない」

「だろうと思った。この行事の由来は、うらぼん経というお経に書かれているんだが・・・」

「わかった。盆のウラに書かれてるから、うらぼん経っていうんでしょ」

「早とちりするな。盂蘭盆経てのはな、何でもこんなことが書いてある」

「そうですね、えらく短いお経だな」

「まだ何も言っていないじゃないか。まあ、聞きなさい。このお経によると、お釈迦様の弟子に目連尊者という人がいて、幼くして父を喪い、母の手一つで育てられ

たそうだ」

「ふーん。うちみたいだね。うちのお袋もオヤジが早く死んだんで苦労した」

「そうかい。しかしこのお母さんは自分の子のことばかり思って、人に少しも施しをせず、大変なケチだったそうだ」

「うちのお袋はケチじゃないが、人にあげるものもなかった。泣けるなー、こんなちくしょう」

「おいおい、こんな所で泣く奴があるか。さて、子の目連はお釈迦様の弟子になり、一生懸命修行して、神通力第一の仏法者になったが、ある亡くなった母を吊うため、神通力で探し求めると・・・」

「庭に咲いていた、というんでしょ。もくれんは、その花に、「お母さん、こんなところ』にと言って思わず泣いた。きれいな話ですねえ」

「勝手に話を作るな。目連尊者は木のモクレンじゃないぞ。彼の母は、なんと餓鬼道の世界に落ち、飢えと渇きの苦しみを味わっていた」

「それで、目連はお盆に食べ物載せて母親の所にもって行った。だからお盆っていうのか」

「うーん、近いところもあるが、もう少し聞きなさい。しかし、目連さんが食べ物を持って行き、母親が手にしようとする、それは燃え上がって、とても食べることができなかった」

「このお母さん、よっぽど、だれかの食いの怨みを買ったんだな。食いの怨みはコワイからね」

「そうかもしれんが、それで目連さんは困ってお釈迦様に相談し、亡者の救済の方法を教えてもらい、そのおかげで、母親は救われたのだよ」

「それで結局、どうしてお盆っていうんですかい」

「盂蘭盆をつづめてお盆というのだが、盂蘭盆ってのは、なんでも倒懸と訳され、逆さ吊りを意味するそうさ。逆さ吊りは地獄の苦しみを意味し、だからお盆の行事は、亡者の苦しみを救済する行事というわけだ」

「なんだか、ややこしいね。しかしその亡者の苦しみにっていうのは、要するに、目連尊者の母親が自分の子ばかりを可愛がったことから起こったわけでしょ」

「うむ、まあそんなところだ」

「だったら、お盆は、こぼんというべきじゃないかい」

「どうしてだい」

「子煩悩の親を救う行事だからでき」

「ふーん、お前さんにしては、よくできた答えだ」

